

〈目的〉 衣服の着脱は着替え、入浴、トイレなど、さまざまな生活場面で行われている。またリハビリテーション医学における日常生活動作の訓練においても衣服の着脱がその項目として挙げられていることから、健常者の着脱動作がどのような過程で行われているか、その動作実態を把握し、着脱の調節機能を明らかにするための基礎資料を得ることを目的とする。

〈方法〉 被験者は健康な女子学生33名とした。ファスナーの明き部位が異なるセミフレアスカート4タイプ（前明き F_1 、 F_2 、脇明き S 、後ろ明き B ）を作製し、着脱動作を行わせた。動作測定は、人工気候室（温度23～25℃、湿度65%）で行い、ビデオカメラを用いて動作過程を観察した。動作終了後、SD法20項目によって4タイプの着用感とイメージを評価させ、動作の総合評価として“着脱しやすい”を順位法で評価させた。動作を着衣と脱衣に分け、さらに動作過程を主動作と補助動作の構成単位として検討した。

〈結果〉 1)動作の所要時間は、主動作よりも補助動作において有意差が見られ4タイプともに着衣>脱衣となり、 $B > S$ 、 $F_1 > F_2$ の順であった。2)SD評価において明き部位の異なる4タイプでは、『あげやすい』『すべりが良い』『はきやすい』『しめやすい』『カジュアルな』に違いが見られ、また“着脱しやすい”順位は F_2 、 S 、 F_1 、 B であった。3)前明き F_1 （右上前）を最も着脱しにくいと評価した群と他群では『しめやすい』『ぎこちない』『着慣れた』に違いが見られた。4)後ろ明き B において、着脱の仕方が異なる2群間では、SD評価においても『しめやすい』『バランスの良い』に違いが見られた。